方向

第一三三号　一九九一年七月一五日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

歌人・大塚五朗　（二四）

1991 6 24　原田憲雄

子　子

一九三九年（つづき）　五朗、四十二歳。十月か十一月、巽南町から上京区大将軍坂田町三十四番地に転宅。

十一月二十九日、水甕京都支社通信『子子（ぼうふら）』第一輯が京都市中京区釜座通り夷川上る前原方水甕京都支社から発行された。編輯兼発行人は「前原利男」となっているが実際の編集者は五朗である。巻頭の「子子の辞」に「水甕の中を広い天地と観じ、子子（けつけつ）として遊弋し、たのしみあそんで…」という。A四版で表紙とも三十四ページの謄写版刷り。光田作治「現実と詩性」（歌論）、前原利男「雪と山姥」（歌）、森田曠平「頼朝漫筆」（随筆）、浅井信子「上高地の宿」（歌）、前原利男「染房雑記」（随筆）、山本杜子郎「絵と歌と」（歌論）、茂尻阿仁「詩三篇」、平二朗「秋草の中」（歌）、大矢道之介「感覚の角度について」（歌論）、川北朋春「雪のある時分の歌」（歌）、高岡歳子「『砧』に思ふ」（随筆）、竹内美津子「満洲の旅」（歌）、大塚五朗「高野原」（歌）、村田芳留子「ギリシャの旅（一）」（紀行）。小冊子ながら賑やかである。

五朗の「高野原」は、前回の「旅拾遺」と一連の歌、そこにない次の五首をここに補っておく。

そば畠のしろきむかふは落葉松の小高き丘に動く夕霧

水上を秋は音にたつ川の音しばし停車の車窓（まど）に寄りくる

あかときと気配うごける日の翳は霧にしめれる部屋に顕（た）ち来ぬ

青々と障子にうつる山ありてねざめ愉しきしばらくはゐる

朝冷えの身にいささかはさびしくてしばしばも見る家の子の夢

ついでながら、『日蝕の庭』五六頁の次の二首も同じ一連のものかと思うので、ここに掲げておく。

涙たりてわが居りし時かうかうと真昼の空に鳶まひ澄みぬ　（松代にて、父の墓）

槻の樹の漸く蔭は及び来てさびしけれども涼しくし見ゆ

さて『子子』にかえろう。「毎月五日の研究会は勿論、毎月の歌会にも出席の数がまことに少い。もつと熱を上げてもよいと思ひこの雑誌も多少刺激になればといふ思ひやりから始つたこと。お互にしつかりやらうぢやないですか。」と「編輯余語」に五朗が書いている。表紙絵と裏カットは手描き友禅の描き手として知られた前原利男の筆である。

なお、消息欄に五朗の転宅が記してある。当時の原田宛の葉書には住所が記入されていず、転宅通知ももらったはずだが残っていない。坂田町三十四番地は五朗の勤務する三中（いまの山城高校）のすぐ北側の住宅だった。戦後、付近全体が建てかわってしまった。

『水甕』昭和十五年二月号。

冬　影

片光（かたかげ）のいつか寒けき池となり岸辺をめぐる鳰鳥のこゑ

夕波のやや立ちそめてひそけさや池心に浮かぶ鳰鳥が二つ

冬鳥のすでに来て鳴くそのこゑは空のくもりの高くはゆかず

女の生の秘（ひそ）けき知りて娘の起居（たちゐ）おのづからにしてしづけかりけり

さす潮の今かあふれて女（ひと）の生（よ）の恥らひに娘はほのぼのとゐる　（庭六一　水甕なし）

つつましく女（をみな）となりし日を居りて娘（こ）はほのぼのと物などを縫ふ　（続風土八五）

戦の今起らむとしてひそかなり昼いまだ乾ぬ道草の露　　野外演習

伝令一騎かけぬけゆきし露野原いま出しばかりの寒き日の色　露営

一九四〇年　五朗、四十三歳。勤務先、住所同じ。松子、四十二歳。朗、二十歳。喜子、十六歳。樹、十二歳。哲、九歳。迪子、六歳。

『水甕』昭和十五年三月号。この作品は前年十二月からこの年一月中旬までに作られたもの。

鷹峰光悦寺

枯草のそよぎひそけしこの道の山がかりきて通ふ風あり　（庭三・続風土二四）

行き通ふ山の時雨に常ぬれて寺庭さむき冬苔のいろ　（〃　・〃　）

日の昃（かげ）りやや庭の面に及びきて花の白さの冴ゆる山茶花　（〃　）

ひよろひよろの松高うして山わたる時雨のあめは直（ただ）に地をうつ（〃　・〃　）

虹たちて何かはなやぐ寺庭の松四五本がひよろひよろとして　（〃　水甕なし）

まなかひに時雨ぐもりてある山の松ばかりなるさびしさにして　（〃・〃　）

ここよ見れば谷なす街の空低く虹こそわたれ色寒き虹

生きて来て人つつましく口あくや死にたる部下のことを先づいふ　中島中尉帰還

『子子』で手許に残っているのは、第一輯以外では、この年一月二十日発行、三月三十日発行の二冊、いずれも第何輯かを記さないので、確かなことはいえないが、たぶん一月発行のが第二輯、三月のが第三輯である。

一月の分の内容は、幸節静彦「非心庵雑記より」（歌）、金沢穣美「寺町通」（歌）、大塚五朗「頭の歌と心の歌」（歌論）、山本杜子郎「むら雀」（童謡）、前原利男「三保の松原」（歌）、高岡歳子「折々の歌」（歌）、平二朗「西陣の歌謡」（紹介）、村田芳留子「ベオグラードの公園にて」（歌）、竹内美津子「図們監視所」（歌）、森田曠平「水尾の小鳥」（随筆）、茂尻阿仁「冬の真昼の夢」（詩）「夢殿」（歌）、木村潤一「埋草」（紹介）。

三月の分のは、大塚五朗「穂積忠氏のことども」（歌論）、高岡歳子「雛」（歌）、平二朗「短歌呆言」（歌論）、竹内美津子「初詣」（短歌）、山本杜子郎「歌道談義」（歌話）、浅井信子「春近く」（歌）、木村潤一「双魚荘雑記」（歌話）、村田芳留子「ギリシャの旅（二）」（紀行）、原田憲雄「暦―新詩社ぶりに―」（歌）「静女三章」（翻訳）、森田曠平「紀元二千六百年元旦桃山御陵に参拝す」（歌）。「編輯余語」に「三月には恭仁京方面への吟行も計画されてゐるし四月には名古屋で中部大会もある。……次輯は青葉の頃出したい……」とあるが、あとは出なかったようである。新聞・雑誌の整理・統合が進められる時世だったからである。

桜井女学校

―春夢女史周辺　二―

1991 6 10　原田憲雄

日本の女子教育事業は米国から派遣されたキリスト教宣教師の手で開始され、一八七〇（明治三）年、東京築地明石町に開いた「築地A六番女学校」が最初の女学校である。明治初年の女子教育は変則的で幼稚であり、生徒も三十歳に近い者と六、七歳の者が同席して英語を習い、日本人で英語教師となった人は、午前は生徒として学び、午後は教師となって教えた。東京では女子が男子の組で英語を学びたいため男装し、横浜では男子が女装して女子の組に列したこともある。三厘で蕎麦屋に入ることができ、一両二分で一か月の食料を賄いえたが当時の女学生の月謝が一両二分であった。このような大金を払っても女子を教育する進歩的な家庭があったのは驚くべきことだが、日本全体からすればきわめて少数であった。坪井家はそのひとつ、すむは恵まれた一人である。

桜井女学校は、桜井ちか子（一八五五―一九二六）が一八七六年、東京市麹町区中六番町に民家を借りて少数の生徒を集めて開いた。のち東郷坂の旧旗本屋敷に移り、東京最初の幼稚園を開き、貧民教育をはじめた。このころの数少ない男子生徒のひとりに宮崎太郎がいる。一八八〇年、ちか子は夫の北海道伝道を助けるため校長をやめ、学校を米国長老教会ヒラデルヒヤ婦人伝道局に移管した。ここで中六番町二十八番地に新校舎を建て矢島楫子を校長としトゥルー夫人が宣教責任者となった。一八八二年、坪井すむが入学したのは、その新しい体制となった桜井女学校であった《女》。次に掲げるのは宮崎太郎夫人澄子が坪井すむ時代をふりかえる「学窓の回想記」である。

思ひ起せば四十有余年の昔、私が十歳の折、東京なる祖父母の望によりて、紀の国の熊野より一家下総の船橋へ引き移り来りし時、祖父の知人の伝手にて私は桜井女学校に入学することゝなり、祖父や父に連れられて学校へ寄宿せり。賑やかな都の物珍しきが上に、国にては見なれぬ校舎の建物や未だ一度も見し事なき西洋の先生方をはじめ矢島先生さへも、何となく日本人とは思はれぬに、国言葉の違ふ私は、皆様と打語ふも恥かしく、妙な思ひなりき。さはれ何かと優しく労はりくるゝ皆様の親切に、いつしか馴れて、山国に兄弟とのみ育ちし、お転婆娘の本性を現はして、何の心配も苦もなく、学校一の暴者とはなりぬ。されど未だ幼かりし故か、父母恋しく家なつかしく、独り窓に依りて夕べ淋しき空を眺めて泣きし折も度々ありき。其時代の友は皆十一二歳のことゝて、姉妹よりも親しかりし故か、つまらぬ事にて物争ひせしこと泣きし事、怒りし事などありき。未だに忘れ得ぬは学校の門の前の堤の様なる所に、雛草多く生えるしを、四五人にて垣の破れより潜り入り、夢中になりて摘み居りしを、矢島先生に見付けられ、其夕礼拝後門外に出でし人々は誰々なるや出でゝ黒板に名を書かれよと申されしが、諸先生初め全校生徒の前なれば、いかにせん胸のみ轟かせて、顔赤らめ居れば、先生には私の名を指されて、確かに其内に居りたる様なれば、出でゝとく書かれよとのことに、詮方なく書きければ、後の友皆な出でゝ書きぬ。夜学後先生の部屋に呼ばれ、一時間余も戒められたりき。月に一回下総より父か母かゞ本所に住む祖父の許へ来り、使もて学校に迎ひをよこせば其日を楽しみにして帰宅し、上野とか向島とか、其折々の所に遊びに行き、帰途には時折、浅草の豆など幾袋にも包み、土産物として持ち帰り、食べ盛りの友等と共に忽ちにして平らげたりき。或時母が永年集めし小布を、丁寧に接ぎ合せて長襦袢を縫ひて送りくれしを人形の着物に縫ふ

布れなしとて、そを解き友にも分かちて大方使ひ果し、家に帰りし折、母に呆れられし事あり。折角の母の心づくしを、むげにせし事返すがへすも口惜しき事したりと今は思へど、かの時代ほど楽しく面白く過せし事なかりき。私が十五になりし秋の初め、家より使もて母急病にて死したれば、とくとく此使と共に帰れとの報に接し、余りの事に物も得いはで室に馳せ入り、思はず声立てゝ泣けば、友の誰彼何とも知らず驚きて室に来り、母の事を聞きて共々に泣きぬ。嗚呼其折の友等の心根思へばなつかしさの増すのみ。

母なき我が家の人々は又遥々と紀の国に帰りぬ。母は逝き家は遠く離れし其後の学校生活の五年間は、一層師の君始め友を又なきものと思ひて暮しぬ。招魂社の坐ろ歩き、雨降る夜半の語らひなど、十年間の長き歳月何一つとして思ひ出ならざる事なく、拙き筆には一朝一夕に書きつくされず、今も折々家のものと語り草になし居る事のみを、かくなん。

これによれば、蜂音庵一家の船橋移住が玄益夫妻の希望によることがわかる。しかし移転によって玄益夫妻と蜂音庵一家が同居したのではなく、玄益夫妻は本所に別居していたらしい。

一八八三（明治十六）年五月二十三日、すむ、桜井女学校小学初等科一級卒業（十歳一ヶ月）《み》。

この八月、十七歳の中野逍遥は東上し、成立学舎で英語を学び、あるいは進文学舎でドイツ語も習ったろうか。大学予備門に入る準備である。かれがすむの兄春児と知り合ったのはこれら学舎においてであったかもしれぬ。

一八八四年六月九日はすむ、桜井女学校中等科五級学術優等賞（署名者、麹町区長大海原尚義ほか）を与えられ

《み》、夏、中野逍遥は大学予備門に入学。九月二十五日、麻布鳥居坂に東洋英和女学校が設立認可された。

一八八六年、東京大学を帝国大学と改称し、予備門は第一高等中学校となった。逍遥の小説『慈涙余滴』は、「明治十九年丙戌九月二十二日下午二時余ヤ神戸三之宮発ノ汽車ニ投シ将ニ伏見ニ向ハントス」ということばで始まる。この年の詩に「京に向う途中伏見を過り桓武帝の兆域を拝す」などがある《中》。

すむが「十五になりし」年は、一八八七（明治二十）年、玄益七十五、蜂音庵五十五、春児十七。一高生の逍遥は「七月八日、誤魔化シ乍ラモ学年試業ヲ終エ」この夏は帰省せず「心ナラズモ二十余日ヲ都街ノ一偶ニ過シ」八月六日「本所ノ寓ヲ立出」で、房総半島を旅し、二十八日、船橋を経て本所に帰っている（房総漫遊小記）。『誰が罪』の発端は倭文子が「十五ばかり」の夏休の初だから、ほぼ逍遥の「心ナラズモ」の時期に当てることができる。玄石が七十一歳というのは、玄益の七十五歳とは合わぬ。また玄石の妻（倭文子の祖母）も娘（倭文子の母）も四年前に一月隔てて死んだことになっているが、すむの母はこの年の秋に死ぬ。すむの祖母が、小説の倭文子の祖母のように、母より一月まえに死んでいるなら、「回想記」に合わせ記してよさそうだが、それがないのは、実際が小説とは離れているのであろうか。しかし、すむの母の死後、蜂音庵が春児を玄益のもとに、すむを桜井女学校の寮にとどめて、一家が新宮に帰るところは、小説と一致する。玄石と俊次の住所を「四谷」とするのは、山の手の住宅街として知られた所だからであろう。玄益は「明治廿四年一月七日東京市本所区石原町ニ於イテ死亡」《坪》していることから察して、晩年は本所に住んだとすべきである。倭文子の女学校所在地を麻布とするのは、桜井女学校の姉妹校ともいうべき東洋英和女学校の所在地を転用したのであろうか。

※　なお前号の「玄益・玄得・玄道・蜂音庵」の坪井玄益の項の「玄益が羽織に包んだ赤ん坊を家人に渡した」（八頁一四行）話につき、田中みどりさんから六月二十八日付の手紙で「子供ごころに聞いたちらちらばなしを自分なりに玄道・玄得ときめて了ったようで……そらおそろしく……私のこの確さのない言葉を取り消させて頂きます」と訂正された。同じ手紙に、坪井玄道の出身地（一一頁七行）につき「鬼越ではっと思い出しました。出嫌いの母につれられて下総の農家（親戚）の梨畑を歩き廻りもぎたての梨を思う存分いただいた想出があります」。また印東玄得の嗣子熊児（九頁一二行）につき「新宮の澄子宛の手紙に差出人　大阪府農学校印東熊児（ゆうじ）明治廿七年九月四日の日付。半紙三枚にこまごまと（一枚三十行）近況らしいものが書いてあります」と教えられた。この訂正により、玄得と玄道が玄益の「養子」であることと、玄道が玄益に養育されたかどうかも、確かなこととはしがたくなった。けれども玄得が坪井仙次郎の兄であることは『新宮市誌』にいい、仙次郎が玄益の次男であることは《唐》にいうから、玄得が、養子か実子かはわからないにしても「子」であることは間違いないだろう。みどりさんがすむ女史に連れられていった鬼越の農家が、玄道の生家ときめることは保留するにしても、そうであった可能性は高く、それなら玄道は玄益の甥くらいには当たったろう。そうして明治の叔父・甥は今の親子とほとんどひとしく、時にはより一層親密だった。だから玄益一家にきわめて近しい人として玄道を加えておくことは、近代初期知識人家庭の一典型としての坪井家を考えるにはむしろ必要なことであろう。

東京に住む玄得の、子の熊児が大阪の農学校にはいるには、京都に住み大阪の教育界にゆかりの深い仙次郎の配慮があったであろう。

中国の詩人と仏教　（一五）

1991 7 5　原田憲雄

一七　陶淵明

一九四一年十二月に、わたし（たち）は例年より三か月くり上げて、大学を卒業しました。太平洋戦争の始まる年で、次の年の二月には入営することが決まっていました。先輩のひとりに出会うと「先生がたのお宅へご挨拶に行ったか」と聞くのです。「いいえ」と答えると、「ほかの先生はともかく、主任教授の所へはお礼に行くものだ」と教えられ、紫野の大徳寺にちかい蘐軒・本田成之先生をお訪ねしました。大学の三年間毎年講義をうけながら先生をお訪ねしたのはこれが初めてでした。それから一週間ほど後に先生からお手紙をいただきました。よくきてくれた、というご挨拶にそえ、先生の揮毫された絵が一枚はいっていました。先生は富岡鉄斎翁のただ一人の弟子といわれ、師風をうけた書画は、先生の学問より有名になっていました。しかしそんなことをわたしが知ったのはずっと後のこと。絵は「虎渓三笑」でした。次のような話を描いたものです。

中国の江西省に廬山という山があります。五世紀の初めに慧遠という名僧が住んでいました。山から里への境に虎渓という渓があり、慧遠は入山の日から、誓いを立てて虎渓から外へは出ませんでした。詩人の陶淵明と道教の修行者の陸修静が慧遠を訪ね、たがいに気持がうち解けました。慧遠が帰るふたりを送る道でも話がはずみ、気づくと虎渓を通りすぎていました。そこで三人は大笑いして別れた、というのです。

陶淵明は詩人ではあっても儒教に深く通じた人。だから三人は儒・仏・道の三教を代表し、教えは違っても、道に達した人たちはこだわりなく親しみあえるものだ、といったようなことを象徴的に語る絵、というのが一般

の解釈のようです。先生はどういうお気持でこの絵をわたしに贈ってくださったのだろう、と思いはしたものの、まもなく兵隊、うろうろしながら敗戦を迎え、その後のあわただしい日ぐらしのなかで、先生の「虎渓三笑」さえどこかにまぎれ、じっくり考えなおすこともしませんでした。

ところで、慧遠は三三四年に生れ四一六年前後に八十数歳で亡くなっており、陶淵明は三六五年に生れ四二七年に六十三歳で死んだようですから、慧遠より三十数歳若いけれども、会っている可能性はありますが、陸修静は四〇六年に生れ四七七年に七十二歳で死んでいて、慧遠の死んだ年にわずか十数歳、陶淵明より四十数歳若いのですから、この三人があの画題のような会合をしえたはずがありません。

「虎渓三笑」がいまの形で語られる古い文献は智円（九七六―一〇三三）の『閑居編』や陳舜兪（―一〇七四）の『廬山記』ですが、楼鑰（一一三七―一二二三）が早くもその史実でありえないことを論証しています。有名な蘇東坡（一〇三六―一一〇一）にも石恪の絵にそえた「三笑図賛」があるものの、笑う三人が誰かは言っていず、それを慧遠、陶淵明、陸修静に当てたのは黄山谷（一〇四五―一一〇五）なのだそうです。いずれにしても「虎渓三笑」は三人の死後数百年に作られた話でした。

ところで三人の会合は作り話にしても、陶淵明と慧遠の間にも何の関わりもなかったのでしょうか。というのは、この二人は、年は隔たっていても同時代人であり、ある時期、きわめて近くに住んでいて、どちらも時代の最高の人物だからです。

『仏祖統記』に慧遠の結んだ白蓮社のことが出ていて、おもしろいことには「不入社諸賢伝」というのがあり、

陶淵明や謝霊運の名がそこに見えるのです。白蓮社にはいらなかったすぐれた人の代表というわけです。陶淵明について、ざっと次のようにいっています。

陶潛、あざなは淵明（別のあざなは元亮）、晋の大司馬だった陶侃の曽孫である。若い時から、心意気が高尚で「五柳先生伝」を作って自分を表現した。当時の人々は実際の記録だと思った。建威参軍をしたのち彭沢の県令になった。監督官がやってくるので「礼服をつけて迎えてください」と下役がたのむと、「安月給のためにつまらぬ連中にぺこぺこできぬ」といって辞職し「帰去来の辞」をつくった。宋が、晋にかわって朝廷をたてると、尋陽（潯陽）の柴桑に住む周続之・劉遺民とともに、新朝廷から招かれても仕えなかった。世間では「尋陽の三隠」と呼んだ。当時、慧遠法師がすぐれた人々と白蓮社を結んでいて、手紙を書いて陶淵明を招待した。淵明が「酒を飲んでもよいのなら」と条件をつけ、それを承知したので、行ったけれども、たちまち眉をしかめて立ち去った。

おもしろい話ですが、『仏祖統記』は十三世紀中頃の志磐がまとめた本で、『閑居編』や『廬山記』より新しく、どこまで信じてよいものかわかりません。ただ話に出てくる劉遺民は陶淵明が「劉柴桑に和す」などの作品を贈った相手で柴桑県令だった劉程之のようですし、周続之はその名を掲げた題をもつ詩がありますから、陶淵明がかれらと付きあいのあったことは間違いなく、ふたりが白蓮社の有力な信者であったことは確かです。

山沢久見招　　山へお招き久しいのに、

胡事乃躊躇　　なんでこんなにためらうのか。

と陶淵明が「劉柴桑に和す」でいう「山沢」（山）は、廬山の白蓮社をさすように察せられます。そうして、

栖栖世中事　　世間のせかせかしたことは、
歳月共相疏　　月日とともにうとくなる。
耕織称其用　　田を鋤き機織りゃ用たって、
過此奚所須　　このうえ何をもとめよう。
去去百年外　　ずんずん過ぎて百年のち、
身名同翳如　　身も名もともに消えうせる。

とうたうのは、せっかくだがわたしはこの貧しくささやかな生活で満足。世間の名声はもとより、この一生の外になにも望むところはない、と白蓮社のとなえる未来の浄土にも、やんわり「お断わり」をいっているように、受け取れます。

当時の慧遠は、廬山にひきこもってはいても、南朝はもとより、北朝にも、西域諸国にも名を知られた高僧で、皇帝や、皇帝以上の権力者が招いても断わり、そのことが許されるほど世間で尊敬された人です。その慧遠が、いくら劉遺民や周続之が誉めたたえても、みずから寺のきまりを無視してまで陶淵明を迎えようとしたとは考えにくいでしょう。陶淵明を慧遠と対等の人物とみるようになるのは、十世紀あたりからのようで、その頃になって「虎渓三笑」の話が生まれるのです。しかし、慧遠そのひとが、仏教をまなぶ前に儒教や道家の思想に深い学識があったことは有名です。儒・仏・道三教の融和を説くには、三人の人物を設定しなくても、慧遠ひとりで十

分で、かれの思想が儒や道にひかれ、仏教としては純粋ではない、という批評さえ生れているくらいです。

陶淵明のほうでは、慧遠のことは、劉遺民などから聞かされ、読書の好きな人だから、慧遠の著作の幾つかは読んでいたと考えてよいでしょう。陶淵明の「形影神（肉体と影ぼうしと精神の対話）並びに序」は、慧遠が沙門は王者に敬礼すべきではないことを主張した論文のなかの「形尽神不滅（肉体はなくなっても精神は不滅である）」という章に対する批評だとする人もいます。陶淵明は、精神的重心の低い人でした。広く深い知識をもちながら、小さな田畑を耕して多くの家族を養わなければならない農夫の視点を見失うまいと努力していたようです。かれから見ると、思想家としての慧遠の高邁さも、背伸びしている　ようだったのかもしれません。しかし慧遠には民衆に対する通俗伝道者としての面もあり、日本でいえばご詠歌や説経節といった、唱導文芸の創始者だったらしく、その面での慧遠から、陶淵明は贈り物を受け取っているようなのです。

陶淵明の代表作のひとつは「帰去来の辞」です。「帰りなんいざ、田園まさに蕪れなんとす、なんぞ帰らざる」にはじまる文章は、古今東西の多くの人に愛読暗誦されてきたものです。あの「帰りなんいざ」の原文「帰去来兮」は、「帰」だけに意味があり、あとの文字はそえことばにすぎない、というふうに説明されてきました。ところが、「帰去来」は仏教では普通に使われる言葉で、浄土門の唱導文芸に「帰去来調」という一類があり、慧遠はその元祖らしく、陶淵明の帰去来はそこからヒントをえたのではないか、という意見が吉岡義豊氏の「帰去来の辞について」に発表されました。一九五七年のことです。反対意見が出たことを聞きませんから、ほぼ定説となっているのでしょう。その要旨に私見も補って簡単に紹介しておきます。

仏教語の「帰去来」の「帰」は南無という梵語の訳で、帰依といっても帰命といってもよく、「去来」は不来不去といっても如来如去といってもよく、つまりは「如来」のことで、大乗仏教で強調する「空」の思想を表現し、空の教えである「法」といってもよく、これを人格的にみれば「仏」になる。だから「帰去来」は、南無如来、南無空、南無法、南無仏と同義だということになります。中国で最初に訳された浄土経典は支婁迦讖の『般舟三昧経』ですが、そこにすでに「去来」の語が現われ、それは時に「過去・未来」という意味にも使われますがその場合でも、時間的制約をこえた仏や法をさし、つまりは「如来」をいっていて、その如来への帰依の心が篤ければ、やがて如来を見ることができるといい、旅人が故郷を恋しく思いつづけると夢に故郷に帰っているようなものだ、といった譬えが説かれます。これは陶渕明の「帰去来の辞」の前半を彷彿させます。慧遠の浄土思想も『般舟三昧経』を源流としており、慧遠の後輩たちのあいだに「帰去来調」という浄土讃歌が生れるので、こんにち慧遠そのひとの「帰去来調」は残っていないにしても、「帰去来調」そのものは慧遠が創出したものであろう、というのです。「帰去来」は、如来に帰依せよ、という命令の意味ですが、如来のもとに帰りましょう、という誘いかけでもあり、仏のござる古里にさあ帰りましょう、というよびかけになり、「帰去来、帰去来」がはやし言葉となるにつれ、「帰去来」が「さあさ、帰ろう」のほうに意味がかたむき、去来の本義が薄れてくるというようなことは、よくある現象です。陶渕明の「帰去来の辞」は、その「帰去来」をそっくり使っているわけです。吉岡氏は「陶渕明が読みうる立場にあった経典の中で、去来を説くもの」として竺法護訳『仏説文殊悔過経』羅什訳『維摩詰所説経（『維摩経』）、同訳『中論』などをあげています。羅什すなわちクマーラジーヴァは

陶渕明と同時代の人ですが、その長安に来たのが四〇一年、『維摩経』の翻訳は四〇六年で、陶渕明の「帰去来の辞」の製作は四〇五年ごろのようですから、竺法護のものはとにかくクマーラジーヴァ訳経典は「帰去来の辞」への直接の影響は考えられません。しかし『維摩経』と同じ年に訳された『妙法蓮華経』の「化城喩品」には、「汝等去来、宝処在近、向者大城、我所化作、為止息耳」とあり「汝ら去来、宝処は近きにあり、さきの大城は、なんじらを止息せしめんとして、化作（幻出）せしのみ」というので、この去来にあたる梵文はアーガッチャントゥ（さあ、来なさい）であり、竺法護の『正法華経』も「速当転進」ですから、「如来」の本義ではなく「帰去来の辞」の去来の方向で使っていることはあきらかです。つまり五世紀の初めには仏教徒のあいだでは、北朝の都長安でも、南朝の文化圏でも「去来」の語が「いざ」「いざや」といった意味で流行していたことの証拠になります。思想・信仰のうえでの流行現象としての白蓮社運動に対しては、一歩離れて、批判的でさえあったが、言葉として流行した仏教語「去来」の、なつかしく慕わしい情感は愛して、おのれの生涯の転回点をくぎる文章に、そっとはめこんだのでしょう。いっぽうであのなまめかしい「閑情賦」をもつくっている陶渕明には、ふさわしい話ではありませんか。

※前号正誤　一三頁二行　漢四書→漢書　一六頁末行　(三)→(二)　四頁一一行　水尾（みのお）に疑義がでましたが、『日本地名大辞典』（角川書店）には「水尾　みずお。みずのお、みのお、とも読む」とありました。なお、第一二一号　一三頁六行　伊達宗城の宗城を《人》により「むねき」と読みましたが、『世界大百科事典』（平凡社）は「むねなり」と読んでいます。ご注意くださった方々に感謝いたします。

息子に近かづく父 ―法華経巡礼 62― 1991 7 14 原田憲雄

4-12. さて、その長者は、自分の屋敷から下り、瓔珞や装身具をはずし、清らかでりっぱな柔らかい着物を脱ぎ、汚れた着物をき、右手にもっこをもち、泥で身を汚し、遠くから語りかけながら、その貧しい男に近づき、近づいてからこう言います。「お前たちはもっこを運べ。ぐずぐずするな。糞を掬い取れ」と。このような方便で、その息子に話しかけたり、語りあったりして、かれにこう言います。「おい、お前はここで仕事をするがいい。ほかのどこへも行くな。特別の賃金を払ってやろう。お前にいるものは何でも、おれに遠慮なく請求しろ、甕代だろうと、壺代だろうと、釜代だろうと、薪代だろうと、塩代だろうと、食べ物だろうと、着物だろうと、な。うん、おれには古いシャツがあった、そいつがお前の間にあって、ほしけりゃ、やってもいいぜ。うん、こんな身のまわりの物で間にあうものがあれば、なんでもみんなお前にやろう。おい、心配するな、おれをお前のてて親だと思うがいい。なぜなら、おれは年寄りで、お前は若い。それにお前は、汲み取りで、おれにずいぶん尽くしてくれた。うん、お前はここでしごとをしていて、うそも、曲がったことも、おべっかも、高ぶりも、うらおもても、やらなかったし、これからもやるまい。万事、お前については、一つとして悪いことは見つけなかった。ほかの連中の仕事には、そういう欠点があったけどな。おれの実の息子みたいなもんだ、お前さんは、きょうからはな」

atha khalu sa gṛha-patiḥ svakān niveśanād avatīryāpanayitvā māly'ābharaṇāny apanayitvā mṛdukā-

ni vastrāni caukṣāny udārāṇi malināni vastrāni prāvṛtya dakṣiṇena pāṇinā piṭakaṃ parigṛhya pāṃsunā sva-gātraṃ dūṣayitvā dūrata eva saṃbhāṣayamāṇo (W: saṃbhāṣamāṇo) yena sa daridra-puruṣas tenopasaṃkrāmed upasaṃkramyaivaṃ vadet/ vahantu bhavantaḥ piṭakāni mā tiṣṭhata harata pāṃsūni/ anenopāyena taṃ putram ālapet saṃlapec cainaṃ vadet / ihaiva tvaṃ bhoḥ puruṣa karma kuruṣva mā bhūyo 'nyatra gamiṣyasi / saviśeṣaṃ te 'haṃ vetanakaṃ dāsyāmi/ yena-yena ca te kāryaṃ bhavet tad viśrabdhaṃ māṃ yācer yadi vā kuṇḍa-mūlyena yadi vā kuṇḍikā-mūlyena yadi vā sthālikā-mūlyena yadi vā kāṣṭha-mūlyena yadi vā lavaṇa-mūlyena yadi vā bhojanena yadi vā prāvaraṇena / asti me bhoḥ puruṣa jīrṇa-śāṭī / sacet tayā te kāryaṃ syād yācer ahaṃ te 'nupradāsyāmi / yena-yena te bhoḥ puruṣa kāryam evaṃ-rūpeṇa pariṣkāreṇa taṃ-tam evāhaṃ te sarvam anupradāsyāmi / nirvṛtas tvaṃ bhoḥ puruṣa bhava yādṛśas te pitā tādṛśas te 'haṃ mantavyaḥ / tat kasya hetoḥ / ahaṃ ca vṛddhas tvaṃ ca daharo mama ca tvayā bahu-karma-kṛtam imaṃ saṃkāra-dhānaṃ śodhayatā na ca tvayā bhoḥ puruṣātra karma kurvata śāṭhyaṃ vā vakratā vā kauṭilyaṃ vā māno vā mrakṣo vā kṛta-pūrvaḥ karoṣi vā / sarvathā te bhoḥ puruṣa na samanupaśyāmy ekam api pāpa-karma yathaiṣām anyeṣāṃ puruṣāṇāṃ karma kurivatām ime doṣāḥ saṃvidyante / yādṛśo me putra aurasas tādṛśas tvaṃ mamādyāgreṇa bhavasi //

逢坂の関

1991 7 6　　原田　慶

大津絵発祥の地といわれる追分・大谷のあたりを歩いてみた。国道一号線が大津から逢坂の関を越えて山科を通り、九条山を過ぎて蹴上の浄水場の傍へ出てくる。その逢坂の関跡のあたりである。

昔、都を出て東国へ行く人や帰る人が山城と近江の国境まで来て、都の思い出に大津絵などのみやげ物を買ったのだろうということを読んだので、わたしも、京都から大津の方向へ行ってみようと思って、三条京阪駅から大津行きの電車に乗った。三十分ほどで追分に着くが、ここは無人の駅である。初めて降りた土地だが、バスでよく通っているので、だいたいの様子はわかる。駅の近くに数軒の民家と、京都にある私立大学の寮がある。少し山の方へ上がった所に光明山摂取院という小さな寺があった。電車の線路を横切って国道へ出る。陸橋を渡って家のある側へ降りると、すぐ下の所で、国道から分かれた五メートルほどの広さの道路が京都のほうへ向かっていて、それが追分町にはいる。そちらへ行ってみると自動車はほとんど通らず、古い寺が広い場所を占めているほかには小さい家が建ち並んで、何となくひなびた雰囲気の残っている土地だった。道より一段降りて中へはいる家が二軒あり、その中の一軒は酒屋と雑貨屋を兼ねている。道に沿って間口が広く、奥行のない細長い暗い店の間に電灯がついていた。声をかけると中で用事をしていたらしい女のひとが出てきた。わたしはフィルムを買いたかったのだった。この店なら、昔、大津絵か、そろばんやおもちゃなどを売っていたとしても、そのままうなづけそうな構えである。屋根瓦はやっと持ちこたえているように、全体に波打っている。低い二階家になっているが、道より少し下に建っているので、二階でも手が届きそうである。誰かがその中に居るらしくて、窓か

らラジオの音楽がガチャガチャと響いている。窓は小さくて、木の枠にカーテンがかけてあるというほどの感じのものだった。追分町にこんなに古い家を大事に守る暮らしが残っているのは、思いがけないことだった。

地図でみると、この追分町は、切り抜いたような形で大津市になっていて、まわりは南から東へも少し入りくんで、西へはずっと京都市山科区である。この追分町の道が、古い東海道の名残りであるらしいことは、「みぎ京みちひだりふしみみち」という石の道標が立っていることで分かる。しかし古い二軒の家のほかには、特別それらしい物はなく、大津絵の影が感じられるようなものは一切なかった。

追分町から引き返して国道へ戻り、大谷の方へ歩き出した。わたしの歩いている所は、逢坂の関跡へ向かって、国道一号線の右側の歩道である。すぐ左の国道には途切れることもなく自動車が流れ、その向うに電車の線路がある。そして線路の向う、上には名神高速道路が通っていてすぐに逢坂山が迫り、その山中のトンネルをJRが通っている。歩いている右側に、歩道に沿って小さな家が並んでいる。そのすぐ後は山である。二十年ほど以前に、この道をバスでよく通ったが、その頃にはこの家々に人が住み、子どもの姿も見られたから、わたしはそう思い込んで来たけれど、今、歩いてみると、どの家もみんな空家になっている。もう長く手を触れたこともない入り口の戸は泥をかぶり、残っている標札も、ほとんど読み取れない。赤い郵便受けに家族の名がはっきり残っているのは、かえって空しい感じがする。誰も歩く人のない歩道を空家の列に気を取られて一軒ずつ眺めて歩いていると、すぐ傍を流れている自動車のことさえ忘れていた。木の柵のついた窓が開け放してある家があったので、のぞいてみると、奥へ三間続いていて、玄関の間は小さく、中の間には掘り炬燵があり、奥の部屋には机が

あって筆立てには鉛筆などの立っているらしいのが影のように見える。人が住んでいるような感じがするが、他にまったく道具がなく、奥の縁側の戸も開いていて、裏庭の植木が見えている。入り口の泥の様子を見てもやはり空家である。大谷町の人達は、国道や高速道路を走る自動車の風に追い立てられて、みんなどこかへ行ってしまったらしい。途中に、走井餅などみやげ物を売るドライブインができていたはずだと思ってもう少し歩いてみると、そこも石材置場になっていて、石の山にヒルガオが網のように蔓を張って、ピンクの花をたくさん咲かせていた。そこを過ぎてもう少し歩くと、やっと人の住んでいるらしい家が数軒あり、どの家にも町会長や保健委員などという札が戸口に掛けてある。人が少いから、町の役割をみんなで分担しているのだろう。そのあたりに、白い和紙を貼った行燈のようなのに、「月心寺」と墨書したものを掛けた小さい門があった。のぞいてみると、走井と書いた井戸が見える。ちょっと失礼して中へ入らせてもらった。玄関の障子が開いているが人は見えない。その横が台所らしい。障子窓が少し開いて中の簡素な様子がこのもしい。茶室風の小さな庵で、前庭に一メートルほどの高さの井戸があり、水が湧き出てあふれ落ちている。立札に、関の清水として歌枕にもなっている水であると書いてあった。大津市が立てた札であると記してあるが、地図では、この寺は京都市にはいっている。他の家と並んでいるように見えるのに、どういう線が引かれたのだろうか。月心寺を出てすこし歩くとみやげ物の店があった。めったに立ち寄る人もなさそうだったけれど、大津の名物らしいものを少し置いている。大津絵の色紙が見えたので入ってみた。鬼の三味線、藤娘などがあったので、たずねてみると、この辺りには趣味で大津絵を描いている人達があるのだという。ほかに花などを描いた色紙もたくさん並んでいる。三井寺の前の「しょ

うざん」という人が今でも大津絵を描いて店を開いており、その人の絵だと色紙が一万円くらいすると、みやげ屋の女のひとが言った。追分には大津絵を描く人はないということや、「月心寺」は京都の画家の別荘で、今は、尼さんが一人で留守居をしているということなどを聞いたが、大津絵についてくわしいことは知らないらしかった。藤娘の色紙を一枚買ったが、趣味で描いている人の絵なので、そんなに高価なものではなく、みやげ絵ていどのものである。そこを出てしばらく行くと空家になっている四軒続きの長屋があって、そこで今まで来た側の家並は終る。陸橋を渡って、国道と線路を越え、反対側へ渡ると、その下が、電車の大谷駅だった。電車はここから逢坂の関の下をくぐり、大津のほうへ出て行く。駅前に料理旅館があり、その左のほうへ二軒めくらいに、大津絵を描いて居た又平さんの家だと聞いたことのある家が見える。のぞいてみたが。草木におおわれ、入り口も閉ざされている。郵便受がついたままになっているので、その辺りが玄関なのであろう。引き返して、駅を右手にだらだら坂をのぼると「元祖走井餅」の石碑が立っていたが、その家も空家である。さらに進んで左に蝉丸神社があった。神社の鳥居は、以前、線路の向う側にあって、境内を分断して電車が走っていたらしいが、今はそれを石段の近くへ移して、境内を電車に譲ったようである。鳥居をくぐると社務所らしい建物があるが、戸は閉じられている。正面にすこし急な石段が二十段くらいあって、上がると神輿倉がある。右手へ坂道を進むと、山の中腹のやや開けた所に蝉丸神社があった。小ぢんまりした美しい社である。すぐ後は山で、静まり返っているので、拝してすぐ引き返した。石段を下りて鳥居を出て、逢坂の関跡に向かって坂道を歩く。

両側は料理旅館の建物ばかりで、事務所、倉庫、洗濯場、調理場、客室などがそれぞれ別棟になっている。こ

の辺りはほとんどが、二つの料理旅館に関係する人達の家ばかりではないかと思われる。さらに進んだ所に逢坂の関跡の石碑がある。とにかく人に出会わない。調理場に人影を見ただけである。

大谷にいつも人の姿の見られた頃、それは三十数年前のことであるが、ここをバスや電車で通ると、人の住む様子もゆったりと美しく、自動車が少なくて空気もひいやりしているように感じた。「逢坂の関跡」と刻まれた碑の傍の駐在所には警察官の姿が見えて、その前に鉄の板を敷いた台計りがあり、時にはその上でトラックの積載量を検査するのだなどと聞いた。ほんとうだったかどうか知らないけれど、そんな話を思い出すだけでも、ずいぶんのんびりした時代だったと思う。今は駐在所に人影はなく「女性の一人歩きはやめましょう」などと書いた張り紙がしてあった。

能の「蝉丸」では、醍醐帝の第四皇子である蝉丸が、幼い頃から盲目であったために、帝の命によって、逢坂の関の辺りに捨てられる。藁屋の中で琵琶を弾いていると、それを聞きつけた姉宮の逆髪が訪ねて、蝉丸に対面し、互いの身の不運を嘆いて、再た別れて行く。逆髪は髪が逆立ってもどらない狂女で、さまよい歩いているが、この時代、女性の一人歩きはなおさら危険だっただろう。しかし賊も哀れんで、狂女には手出しをしなかったという。昔は人々が神や霊魂などを信じていたから、狂女は恐れられたのかもしれない。百人一首にもとられてよく知られる歌、

逢坂の関に庵室を造りて住み侍りけるに行きかふ人を見て

これやこの行くもかへるもわかれつつ（ては）知るもしらぬも逢坂の関　蝉丸

がある。蝉丸という人はどういう人かはっきりとわからないらしい。今昔物語に琵琶法師として、平家物語に醍醐帝の第四皇子として出ている。蝉丸神社はこの人を祀った関の守り神、行通安全の神社である。

事典によれば、逢坂山は大化の改新の時、畿内圏の北限として関が置かれたらしいが、平安初期、三関廃止に続いて七九五年に逢坂の関も廃止された。八一〇年、薬子の変に再興されて、愛発（あらち）の関に代って不破、鈴鹿とともに三関の一つになったそうである。平安末期には、山門、寺門の僧徒が、戦国時代には付近の豪族が、この関を押えて私利をはかったという。

源氏物語の中で、石山詣でに出かける光源氏と、かつて源氏が恋した空蝉が夫の任地から帰ってくるのと、この関で行き違う場面があり、絵巻の中では、唯一の、山水人物点景画だそうである。逢坂山の辺りの景色が美しい緑で描かれて、牛車や馬上の人、琵琶湖も描かれている。都を出た土地の明るさと国境らしい険しさが感じられるが、現在の逢坂の関跡の地も、自動車を気にしなければ、山の中のひっそりとした集落である。わたしが引き返して電車の駅に来ると、先ほど、蝉丸神社の石段を下りてきた、小学三年生くらいの男の子が、一人で電車を待っていた。学習塾へでも行くのだろうか。

昔から大勢の人が往来した山城と近江の境の地は、さまざまに姿を変えてきたのだろうけれど、今はただ自動車や電車が通り過ぎるだけで、京都市からも大津市からも行政の手の届きにくい所となっている。それにしても、これほど、空の家ばかりが並んでいるのだとは思ってもみなかった。この町がすっかり消えてしまうことはないと思うが、これから先どんな姿に変わって行くのだろうか、しばらくは興味もって見ていたいものである。